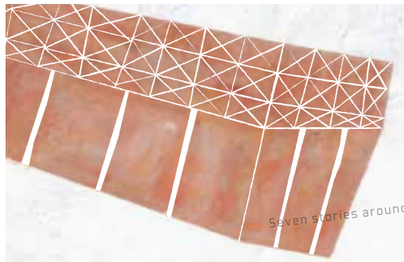

美術館をめぐる7つのお話

会　　場：大分県立美術館 2階 アトリエ
時　　間：各回13:30〜16:30
対　　象：中学生から一般（要事前申込）
定　　員：50名程度（各講座）
参 加 費：無料
申込方法：希望する講座名（複数可）、氏名（ふりがな）、年齢、住所、電話番号（必須）を記入の上、往復はがき、またはホームページ[http://www.opam.jp]の申し込みフォームよりお申し込みください。定員に達し次第、ホームページで受付終了をお知らせします。

募集期間：2019年9月4日（水）〜各講座の3日前まで（必着）

●お問い合わせ・お申し込み先
大分県立美術館教育普及グループ
〒870-0036 大分市寿町2番1号
tel:097-533-4502　fax:097-533-4530　mail:edu@opam.jp

其の一
2019 10/12 土

「アートが変わった　美術館の変わる日」

講師：加藤康彦
（佐伯市大手前開発推進室 参事／前大分県立美術館副館長）

時代が変わりつつある今、美術館に何が求められているのでしょう。大分県立美術館が生まれる前の大分県立芸術会館時代から、長年大分県の美術と美術館を見てきた加藤康彦さんに、これからの美術館についてお話を伺います。

profile

大分県の美術と作家を対象に数々の展覧会を企画するとともに、国内外の美術に関する誘致展を多数手がける。県立美術館建設に当たっては準備段階からこれに関わり、先進的な美術館を数多く視察、研究してきた。美術事象を内からだけでなく、外からの目線でも捉えることの必要性を痛感。現在は佐伯市に建設中の「さいき城山桜ホール」の開館準備に奔走中。

其の二
10/26 土

「美術館はどこから来たのか、美術館は何者か、そしてどこへ行くのか」

講師：川浪千鶴
（元高知県立美術館企画監兼学芸課長／フリーランスキュレーター）

明治期に誕生した日本の美術館は、社会のあり方とともに変遷と成長を続け、調査研究、保存修復、展示公開、教育普及という活動の基本を形づくるとともに、地域ごとに独自の成果を積み重ねてきました。地域社会におけるアートと美術館の可能性を考え、九州や四国を中心に様々な美術館の活動を調査・研究している川浪千鶴さんにお話を伺います。

フリーランスキュレーター。1957年山口県下関市生まれ、福岡市在住。早稲田大学卒業後、81年に福岡県立美術館学芸員となり、福岡県立美術館学芸課長ののち、2011年から2018年まで高知県立美術館企画監兼学芸課長、石元泰博フォトセンター長を務めた。専門は日本の戦後から現代の美術、美術館教育、ミュージアムマネジメント。
●主な企画展＝「アートの現場・福岡」シリーズ（1998〜2009）、「菊畑茂久馬と〈物〉語るオブジェ」展（2008）ほか。主なマネジメント担当企画展＝「大絵金展極彩の闇」（2012）、「岡上淑子コラージュ展はるかな旅」（2018）など。地元福岡のアートシーンをサポートするプロジェクトや鑑賞教育にかかわる企画を館内外で行う。

其の三
11/2 土

「コレクションに耳を澄ます　ブリヂストン美術館から　アーティゾン美術館へ」

講師：貝塚健
（石橋財団アーティゾン美術館 教育普及部長）

実業家・石橋正二郎が個人コレクションを公開し人々と分かち合うために、1952年に開設したブリヂストン美術館は、ビル老朽化のために改築し、来年1月にアーティゾン美術館と名前を変えて再開館します。研究、展覧会、そしてラーニングプログラムも、様々な人の思いがこめられて少しずつできあがったコレクションが核となって展開されていきます。今後の活動について、教育普及部長の貝塚健さんにお話を伺います。

母親に連れられて小学校入学前から美術館に通い始め、幼い頃から美術に親しむ。中学生になると一人で美術館を訪れるようになり、とくに西武美術館（セゾン美術館）が好きで足繁く通う。東京大学文学部美術史学専修課程卒業。1989年10月（当時30歳）よりブリヂストン美術館学芸員。専門は日本近代美術史。
●企画・担当した主な展覧会：「小出楢重の自画像」（1998年）、「藤島武二展」（2002年）、「岡鹿之助展」（2008年）、「安井曾太郎の肖像画」（2009年）、「青木繁展」（2011年）、「描かれたチャイナドレス」【2014年】など。●著書：『博物館概論』（樹村房、共著）。第20回 倫雅美術奨励賞受賞（「岡鹿之助展」展の企画およびカタログ中の論文／2008年）

其の四
11/9 土

「街・人とアート　美術館の役割」

講師：菅 章（大分市美術館館長）

大分市美術館 菅章館長は、作家活動、美術教員を経て、美術館に関わり始めました。そして大分市の街中とアートを結びつける「トイレンナーレ」や「回遊劇場〜ひらく、であう、めぐる〜」を開催しています。多くの美術領域を横断してきた菅館長に、時代が変わりつつある今、美術に対する想い、そして美術館の役割について、ご本人の歩んできた歴史とともに伺います。

大分市美術館館長。東京造形大学造形学部美術学科絵画専攻卒業。鳴門教育大学大学院修士課程修了。2010年より現職。美術館連絡協議会理事。国際美術評論家連盟会員。大分県立芸術文化短期大学非常勤講師。
●企画展：ネオ・ダダJAPAN1958-1998 ―磯崎新とホワイトハウスの面々―（1998）、吉村益信の実験展（2000）、村井進吾 ―思考する石―（2001）、アート循環系サイト（2002）、磯崎新 美術館と住宅（2004）、芸術都市の水脈展（2015）、回遊劇場 SPIRAL（2019）●受賞：美術手帖芸術評論佳作「アンチミメーシスの文脈 ―川俣正におけるコンテクストの意味―」（1993）、『彫刻の森美術館開館25周年記念彫刻評論集』「彫刻における場と外在性」（1994）●著書：『ZOKEI』（六耀社・1997）・『美術鑑賞宣言』（共編著・日本文教出版 2003）・『成田克彦「もの派」の残り火と絵画への希求』（共著・東京造形大学現代造形創造センター 2017）

其の五
12/14 土

「現代美術の楽しみ方」

講師：青野和子（ハラ ミュージアム アーク 館長）

ハラ ミュージアム アークは東京都品川区にある原美術館の別館として1988年に開館し、国内外の現代美術を中心とするコレクションの中から様々な企画展を行っています。2008年に書院造を参照してつくられた特別展示室「観海庵」では、東洋古美術を現代美術と一緒に展示しています。私立美術館、そして現代美術を扱う美術館としての在り様について、お話を伺います。

1985年より学芸員として原美術館に勤務。ハラ ミュージアム アーク設立に関わり、原美術館の「ハラドキュメンツ6：須田悦弘　泰山木」（1999）、「横尾忠則作 暗夜行路」（2001）、「篠田桃紅 朱よ」（2003）、「タピエス―スペインの巨人熱き絵画の挑戦」（2005）、「ヨロヨロン 東芋」（2006）、「ヤン フードン―将軍的微笑」（2009〜10）のほか、ハラ ミュージアム アークでの「鬼頭健吾 MULTIPLE STAR」（2017）そしてハラ ミュージアム アークと原美術館で同時開催の「加藤泉 LIKE A ROLLING SNOWBALL」（2019）などを企画。教育普及プログラムやコレクション管理も担当。ハラ ミュージアム アーク副館長を経て同館館長。

其の六
12/21 土

「第三世代の美術館とこれから」

講師：米田耕司（長崎県美術館館長）

観光都市長崎にある長崎県美術館。美術館として観光客を迎える使命がある中、展覧会を企画していくには、何が必要になるのでしょう。またアムステルダム美術館や「第三世代の美術館」など、作品を展示するだけでない美術館の在り方について、館長 米田耕司さんにお話を伺います。

昭和20年大阪市生まれ。國學院大学文学部史学科卒業。平成元年千葉県立美術館学芸課長、平成6年千葉県立安房博物館長。平成10年千葉県立美術館副館長、平成14年千葉県教育庁文化財課長。平成15年千葉県立美術館長、（財）日本博物館協会理事、芸術文化振興基金専門委員、平成19年より長崎県美術館館長、長崎県ミュージアム振興財団常務理事。
千葉県教育功労者の表彰 NHK 地域放送文化賞を受賞。
●著作：「不破 章」（日本の水彩画全集 第20巻）・「新版・博物館学講座」（全15巻）など多数。
長崎大学大学院で講座を開講。

其の七
2020 1/18 土

「美術の境界線をいったりきたり〜美術館はどこへ行く」

講師：木下直之（静岡県立美術館館長、東京大学名誉教授）

美術館から博物館、さらに大学へと渡り歩き、美術の境界線を文化資源の視点でたどり続けてきた木下直之さんは、3年前に再び美術館の世界に戻ってきました。これからの美術館はどこに向かうのか? 大分県の朝倉文夫の彫刻はすべてチェック!もちろんゴームリーも。さらには「動物園巡礼」の途上でラクテンチや別府地獄も見逃さない木下館長の話は、必見の「7つのお話」最終回です。

1954年浜松市生まれ。東京藝術大学大学院修士課程中退。兵庫県立近代美術館学芸員、東京大学総合研究博物館をへて、東京大学大学院教授（文化資源学）。現在は静岡県立美術館館長。近代日本美術を中心に、写真、建築、記念碑、銅像、祭礼、見世物など社会や国家にかかわる表現、物質文化全般について幅広く研究を行う。忘れられたもの、消えゆくものなどを通して日本の近代について考えてきた。2015年春の紫綬褒章、2017年中日文化賞。
●著書：『美術という見世物―油絵茶屋の時代』（平凡社、1993年、サントリー学芸賞）、『ハリボテの町』（朝日新聞社、1996年）、『写真画論』（岩波書店、1996年）、『世の途中から隠されていること』（晶文社、2002年）、『わたしの城下町』（筑摩書房、2007年、芸術選奨文部科学大臣賞）、『股間若衆―男の裸は芸術か』（新潮社、2012年）、『戦争という見世物』（ミネルヴァ書房、2013年）、『銅像時代』（岩波書店、2014年）、『近くても遠い場所』（晶文社、2016年）、『せいきの大問題』（新潮社、2017年）、『動物園巡礼』（東京大学出版会、2018年）、『木下直之全集』（晶文社、2018年）。